愛媛大学教育学部保健体育紀要第７号：45-52, 2010

大学教育におけるスポーツ人類学を考える

石井　浩一[1)]

A Study on Sport Anthropology in a University Education

Hirokazu Ishii [1]

Key words: university education, sport anthropology, sport culture

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education, Ehime University, 7,45-52, March, 2010)

キーワード：大学教育，スポーツ人類学，スポーツ文化

Ⅰ　はじめに

2009年8月27日，日本体育学会第60回大会スポーツ人類学専門分科会で「大学教育におけるスポーツ人類学(Part2)」と題するシンポジウムが行われた。本シンポジウムは，2008年の体育学会におけるPart1（これが結果的には東日本篇となった）に続いて，西日本の大学に勤める3名の教員が，各自担当する授業について発表し，次に参加者からの質問を受けて討論を交わすという形式がとられた．

司会は瀬戸口照夫氏（鹿児島県立短期大学），シンポジストは，髙橋京子氏（早稲田大学オープン教育センター），熊野建氏（関西大学社会学部），そして筆者であった。筆者は，勤務する愛媛大学教育学部の専門教育として行っている「スポーツ文化論」，共通教育のうち全学必修科目の「コース初歩学習」，大学院教育学研究科の「体育学特論Ⅴ」の事例について発表した．

本小論は，スポーツ人類学専門分科会が行ってきたシンポジウムのうち，主に「大学教育におけるスポーツ人類学Part2」を振り返り，大学教育におけるスポーツ人類学について考えたことをまとめたものである．

Ⅱ　スポーツ人類学の研究と教育

Ⅱ－１　研究動向

「スポーツ人類学」は，英語のスポーツ・アンソロポロジー(Sport Anthropology)あるいはアンソロポロジー・オブ・スポーツ(Anthropology of Sport)の日本語訳として創り出された名称である．英語圏における「スポーツ人類学」の登場は，1985年，ケンドール・ブランチャード(Kendall Blanchard)とアリス・タイラー・チェスカ(Alyce Taylor Cheska)によって書かれた“The Anthropology of Sport: An Introduction”が最初であった．

日本においては，これが大林太良監訳，寒川恒夫訳で，1988年に『スポーツ人類学入門』として出版された．また同年，日本体育学会の第13番目の専門分科会として「スポーツ人類学専門分科会」が承認された．これをもって日本では，スポーツ人類学が学問分野の1つとして位置づけられたことになる[1)]．

スポーツ人類学専門分科会設立の翌年，1989年の日本体育学会から2003年3月の日本スポーツ人類学会第4回大会までの研究動向調査によると[2)]，個人研究発表170題の内，研究対象地域の約55％が日本国内，約45％が国外であった．2001年8月時点での調査では，国内60％，国外40％であったということから，徐々に国外のフィールドを対象とする研究発表が増加している傾

1）愛媛大学教育学部
〒790-8577　愛媛県松山市文京町３番

1．*Faculty of Education. Ehime University, Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577, Japan*

向にある．国外の地域を見ると，約64%がアジアで，なかでも東南アジア，東北アジアを対象地域としたものが多いが，この割合も2001年の80%より低下している．

一方，研究対象とされたスポーツを見てみると，日本国内では舞踊が最多で，相撲，綱引き，舟競漕と続く．国外では，遊戯，格闘技，相撲，舞踊の割合が高いが，近年では研究対象が多様化してきている．

以上のことから，スポーツ人類学の研究は，徐々にその研究対象地域・種目ともに拡大，多様化してきていることがわかる．その理由としては，特に若手研究者の興味と関心が拡大してきていることによると分析されている．

このように，アカデミズムのなかでさまざまな活動が行われ，その成果が着実に現れてきたのとほぼ同じ頃から，スポーツに対するとらえ方に少しずつ変化が現れはじめた．スポーツは単に健康，体力の増進，競技力向上といった側面だけではなく，文化の問題として意識され，語られるようになってきたのである．

Ⅱ－2　スポーツ人類学の教育

スポーツを文化としてとらえ，語ってきたのは主に大学教員である．大学教員の仕事は，教育と研究という二本柱で成り立っている．では，研究は教育にどう反映され，活かされているのだろうか．研究の方は，学会や研究会等を通じて，誰がどんな研究をしているか，という情報は入ってくるが，教育となると，なかなか情報は入ってこない．

スポーツ人類学専門分科会が設立されて初期の頃のシンポジウムでは，綱引き，舞踊，相撲など，会員の関心の高いスポーツを取り上げて，スポーツ人類学の研究方法と研究対象について議論してきた．また，エスニシティ，観光化など文化人類学の理論を用いて，スポーツ文化を考察してきた．その後，日本スポーツ人類学会が誕生すると，徐々に専門分科会との違いを意識するようになっていった．すなわち，専門分科会は日本体育学会の分科会であるから，少なくともシンポジウムは，教育に関わる企画を念頭に立てようという気運が出てきたのである．その後，専門分科会ではむしろ積極的に教育に関するシンポジウムを行ってきたのではないかと回想する．

このような企画は，たとえ1年に1回であるにせよ，とてもありがたいことであると思う．先ほど述べたように，教育となると，なかなか情報は入ってこない．いくつかの大学では，教養科目として，また専門科目として「スポーツ人類学」や「スポーツ文化論」といった科目が開かれ，スポーツという現象を社会や文化との関わりのなかで理解していくための授業が展開されるようになった．しかし，その実，具体的な内容については学会や研究会の合間の雑談で耳にする程度である．そこで専門分科会では，まず民族スポーツ（伝統スポーツ）を授業に取り入れている方に話していただこうという企画が出た．それが，3年続いた以下のシンポジウムである．

2003年日本体育学会第54回大会
テーマ：「民俗舞踊と教育プログラム」
演　者：遠坂裕（北九州市立桜丘小学校）；
沖縄民舞「エイサー」を通して－教育現場における意義と課題－
近藤洋子（国際基督教大学）；民俗舞踊教育の意義と問題点
吉川周平（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）；民俗舞踊と教育プログラム－民俗芸能と日本の「体育」－

2004年日本体育学会第55回大会
テーマ：「エスニック・スポーツと教育プログラム」
演　者：山田理恵（鹿屋体育大学）；薩摩の「ハマ投げ」普及への取り組み
外間哲弘（沖縄県空手博物館）；空手の学校教育への導入

2005年日本体育学会第56回大会
テーマ：「エスニックスポーツと教育－学校教育におけるエスニックスポーツの教材化にむけて－」
演　者：山本貞美（放送大学徳島学習センター）；「ちょんかけごま」の教材化
亀谷真知子（東京外国語大学）；インドネシア・バリ島の舞踊の教材化－東京外国語大学における二つの実践－

上記のシンポジウムのうち，2003年と2005年は残念ながら，筆者は参加できなかった．そのため，詳しい内容はわからない．2004年のシンポジウムは筆者が司会の1人であったので，誰をシンポジストとして招くか，人選の段階から関わった．そこで，鹿児島県の伝統スポーツであるハマ投げを鹿屋体育大学の行事として行っている山田氏と，空手家として名高く，琉球空手の学校体育導入に尽力された外間氏をシンポジストとして招聘することになった．

山田氏は，ハマ投げがどのように行われてきたのか，その形態と変遷，現状について，これまでの研究[3]をもとに話され，ハマ投げは授業として行っているわけ

ではないが，学長杯ハマ投げ大会を行っている事例について述べられた．一方，外間氏は長く高等学校の教員として教鞭を執る傍ら，琉球空手の普及に奔走されている方である．その活動は国内のみならず，海外にまで及んでいる．沖縄では，学習指導要領に空手が入っていること，教員採用試験で空手の実技を課すなど，初めて知ったことが多かった．

以上のシンポジウムは，スポーツ人類学の教育を考えていくうえで，大変参考になった．ただ，これらのシンポジウムは大学教育を前提に組まれたものではなかったため，今度は大学の教員はどのような授業をしているのか，それを開陳していただこうという企画が持ち上がった．それが2008年の「大学教育におけるスポーツ人類学(Part1)」と2009年のPart2であった．そこで，次に筆者がシンポジストとして参加したPart2について，振り返ってみることにする．

Ⅲ　スポーツ人類学の授業

Ⅲ－1　カラリパヤットの体づくり・心づくり実践

まず初めに，高橋氏が担当されている授業の事例について，ふりかえっていく．高橋氏によれば，大学体育において，半期15回，週1回という限られた時間，環境下では現地通りの実践は不可能である．こうした前提のもと，自身の調査，研究[4]のなかから得られた情報を手がかりに，楽しみながらカラリパヤットの体づくり，心づくりに重点を置いた授業づくりをしているという．以下に挙げたのは，シンポジウム当日配布された資料に，筆者が若干の訂正を加えたものである．

科目名：アジアのフィジカルエクササイズ（基礎）
　－インドのカラリパヤット－（選択科目）
講義概要

本授業では，アジアのフィジカルエクササイズとして，インドのマーシャルアーツであるカラリパヤットを中心に，ヨーガを取り入れた実技を行なう．

カラリパヤットは，南インド・ケーララ州に伝承されるマーシャルアーツである．カラリパヤットは，戦士の身体訓練として発達したトレーニングで，一説には空手の源流ともいわれている．欧米のダンサー，俳優，格闘家の中には，これをトレーニングの一環として取り入れる人もいる．したがって，健康な体づくりを目指す学生はもちろんのこと，舞踊やスポーツの実践者など，多くの人に適した教材である．加えて，カラリパヤットは，単なるトレーニングの域にとどまらず，医学や信仰などの要素も含んでいる．そのため，体験を通して異文化についても学ぶことができる．

一方，ヨーガもインドを代表するエクササイズである．本授業では，ヨーガの導入として呼吸法などの基本を取り入れ，心と体の調整を体験する．

本授業の目標

1. カラリパヤットにおいて健康上欠かせない柔軟性を強化し，しなやかな体を作ること．ただし，各自が無理のない範囲内で行うことが前提であるので，各自の習熟度に合わせて行う．
2. ヨーガにおける心と体のバランス調整を身につけること．
3. 早稲田式カラリパヤットとして，音楽にあわせ，グループごとに楽しみながら，心と体を健康にすること．
4. 授業の成果をパフォーマンスとして発表する．なお前期は，基礎と位置づけるため，運動経験がなく，体力に自信のない方から自信のある方まで，幅広い層に適した内容とする．

シラバス：授業計画（テーマ，ゲスト）

1. オリエンテーション（授業の目的，進め方，服装，評価，解説等）
2. ウォームアップ，クールダウン
3. ヨーガ　1)呼吸法　2)基本のポーズ
4. カラリパヤット　1)祈りの作法，休息の姿勢，基本姿勢
5. カラリパヤット 2)脚のエクササイズ1
6. カラリパヤット 2)脚のエクササイズ1
7. カラリパヤット 2)脚のエクササイズ2
8. カラリパヤット 2)脚のエクササイズ2
9. カラリパヤット 2)脚のエクササイズ3
10. カラリパヤット 3)基本動作プータラトラル
11. カラリパヤット 3)基本動作プータラトラル
12. グループワーク，部分練習
13. 公開パフォーマンス
14. 技術テストおよび解説
15. ビデオ鑑賞，レポート提出，総まとめ

高橋氏が本授業を構想するうえで，第一に考慮したことは，構成であるという．すなわち，上記のように，a.ウォーミングアップ→b.祈り→c.休息の姿勢→d.部分練習1：トールドゥ・アマルヌ→e.部分練習2：方向転換の姿勢→f.主活動→g.クーリングダウンという流れで授業を構成している．特にdの部分練習1とeの部分練習2は，股関節の柔軟性強化に関わり，健康な体づくりにとって最も重要な動作であるという．インドでは，本来部分練習を行わないが，時間，環境ともに制限

された授業では部分練習が不可欠と判断し，このような構成にしたということであった．

第二に考慮したことは音楽の使用で，グルカルのかけ声の代わりに，音楽に合わせてリズミカルに動けるよう工夫しているという．また，授業でのアレンジについては，現地調査の際，グルカルへのフィードバックを欠かさずに行う．学生には本来の姿との差異を伝達しながら，体づくり，心づくりを身につけられるよう，身体表現の要素も加えつつ実践しているということであった．

高橋氏は，ここ数年インド南部のケーララ州でフィールドワークを行い，カラリパヤットの研究と実践を続けている方である．今回発表された授業は実技であるが，当然カラリパヤットに関する講義も授業科目のなかに組み込んでできるわけであるから，実技と講義の両方で教育ができる強みがあるといえる．

Ⅲ－2　スポーツと文化人類学講義

次に，熊野建氏が発表された授業についてふりかえってみたい．熊野氏は文化人類学，なかでも通過儀礼論を専門としているが，スポーツ人類学にも関心を持たれ，フィリピンのルソン島に居住するイフガオ族の遊戯・スポーツの研究をされている[5]．このような経歴を生かし，文化人類学の講義のなかにスポーツに関する個人的な関心事を取り入れている．

講義概要

○文化人類学における応用的な問題を扱うが，遊びの文化的な位置から始め，遊びとスポーツの関係，身体使用とスポーツの人類学を紹介する．

○スポーツ人類学の実際，特にエスニックスポーツに注目し，文化論的に扱う．また観光資源になる魅力とともに，スポーツの有用性について論じる．スポーツの現代的な展開は，最後に扱うことになる．

○本講義では，いわゆる文化人類学におけるトレンドとは一線を画し，通時的な展開（歴史）をも扱い，これらを共時的な構造として，受講生にいかに感じ取っていただくかは，春学期と同様に最大の課題である．

講義計画

1. イントロダクション：スポーツ人類学とは何か？
2. 遊びと文化
3. 遊びと儀礼，スポーツ
4. 日本の伝統スポーツと国際化
5. 民族スポーツ
   5-1 イフガオの伝統儀礼とスポーツ
   5-2 中国の少数民族運動会の事例から
6. 趣味の実践としてのスポーツ
   6-1 趣味の実践とフランスの階層社会
   6-2 新スポーツとは

講義内容

スポーツの定義

○遊びからスポーツへ
　ホイジンガとカイヨワの遊び論（講義回数：2回）
　遊び論批判と継承（同1回）：ベイトソン，中沢新一ほか

○フランス社会学・民族学と身体論（同2回）
　身体技法
　象徴的二元論（右手の優越）：身体加工ほか
　スポーツの分類（ブルデュー）：二項対立
　スポーツ＝生産物の受容と供給（ブルデュー）

遊び，儀礼，スポーツ

○沖縄三大綱引き（講義回数：1回）
　儀礼性，世界観
　与那原大綱引き：写真資料と解説

○イフガオのエスニックスポーツ（同2回）
　遊びと競争：足相撲，腕相撲ほか（ビデオ資料）
　神明裁判としてのイフガオ相撲
　季節儀礼としてのイフガオ相撲
　エスニックスポーツと観光

○中国少数民族の伝統体育運動会（ビデオ資料のみ）

スポーツの変遷

○図式（一般的）：民俗モデル→近代スポーツ→現代スポーツ

○スポーツ近代化論：グットマンに依拠

○スポーツ近代化論の普遍性と特殊性
　相撲の近代化＝逆世俗化過程：L. トンプソンに依拠

スポーツ実践とフランス

○スポーツ実践の分布状況：利益とコスト

○道具/賭けとしての身体

○健康崇拝：禁欲主義

○スポーツの分類

○スポーツ実践の卓越化戦略

○支配層のスポーツ実践

○スポーツ実践の正当化戦略

○支配階層内部のスポーツ実践例

○新スポーツ

熊野氏は，かつて教養科目の社会学としてスポーツを5

年間扱い，その後7年間の空白の後，最近3年ほど社会学部で専門科目の文化人類学として再びスポーツを扱うようになったという．7年間の空白期にスポーツへの私的な関心から少しずつ論文を書くようになり，現在も観光開発などとエスニックスポーツの関係に注目しているという．

スポーツ人類学は，スポーツ科学と人類学双方に籍を置く総合科学であるから，スポーツ人類学者は，本来双方の知見を持ち合わせていなければならない．しかし，人類学，なかでも文化人類学について独学で学んできた筆者にとっては，文化人類学者がどのように授業のなかでスポーツを扱っているのか，については以前から知りたいことであった．今回1つの事例ではあるが，筆者にとっては自身の不勉強さを新たに認識するとともに，大変刺激を受けた発表であったことを述べておく．

Ⅲ－3　スポーツ文化論

Ⅲ－3－1　スポーツ文化論の推移

最後に，筆者が行っているスポーツ人類学の授業について述べていく．まずは，「スポーツ文化論」から述べ，次いで，その他 2 つの授業の事例を述べていく．初めに，「スポーツ文化論」がどのようにしてできたのか,そして今日までどのように推移してきたのかについて述べておく．以下は,シンポジウムで話した内容および資料に加筆・修正を加えたものである．

2001(平成 13)年度，教育学部生活健康課程健康スポーツコース開設に伴い，選択科目として「スポーツ文化論」を立ち上げた．従来の「体育史」(教育学部学校教育教員養成課程の選択科目)でも,いわゆるスポーツ文化については講義してきたし,当然入れなければいけない内容である．「体育史」は何も「体育(狭義には学校体育)の歴史」のみを教えればよいのではなく，大学教育においては，広く「スポーツ史」という視野から授業を作り上げていく必要があると考える．ただし，「体育史」は旧来の教員養成課程の授業科目名として，依然存在しているわけだから，「スポーツ史」に変えるわけにはいかない．

一方，いわゆる新課程を起こすときには，当然，新課程独自の授業科目を作らなければならない．そこで，新たに立ち上げたのが「スポーツ文化論」であった．この授業を立ち上げる際に考慮したことは，「体育史」の受講生も受けられるようにしようということだった.すなわち，先ほど述べたように，「体育史」の授業でもスポーツ文化の内容は入れなければならない．これは必要なことである．

では，「スポーツ文化論」に歴史は不要かというと，そんなことはありえない．文化は歴史の産物である.世代から世代へ受け継がれ，徐々に変化しながら人々の生活に根付いていくのが文化である.したがって，体育史・スポーツ史の内容を全く取り入れない「スポーツ文化論」は考えられない.したがって，別々に授業をした場合，重複する部分が多くなり，また逆に互いに足りないものを残したまま終わることになる．

筆者はこのような考えのもとに，「体育史」と「スポーツ文化論」は合同授業という形態にした．教科書は『スポーツ史講義』[6]を使用することにした．その後，2008(平成20)年度には，教育学部スポーツ健康科学課程(2 年次よりスポーツ指導者養成コースとスポーツキャリア開発コースに分かれる)が開設され，スポーツキャリア開発コース 2 回生の必修科目(前学期開講)となった(スポーツ指導者養成コースは選択)．教科書を『スポーツ人類学』に変更した．これによって,授業内容はスポーツ人類学にシフトすることになった．問題は,「体育史」の内容をどうするのかということだが,この点については，これまでの授業と同様,当然授業のなかに取り込んで行っていく．では次に,「スポーツ文化論」の授業展開について述べていく．

Ⅲ－3－2「スポーツ文化論」の授業展開

2009(平成 21)年度の事例

受講生:学校教育教員養成課程保健体育専修 2 回生 5 名(体育史)，スポーツ健康科学課程スポーツ指導者養成コース 2 回生 5 名，スポーツキャリア開発コース 2 回生 11 名，生活健康課程健康スポーツコース 3 回生 20 名(計 41 名)

○授業のキーワード

スポーツ人類学(Sport anthropology)，スポーツ文化(Sport culture)，民族スポーツ(Ethnic sports)，国際スポーツ(International sports)

○授業の目的

スポーツを文化として理解することの重要性がうたわれるようになった今日，本授業はこれに資するものである．本授業では，スポーツに凝縮された社会・文化を文化人類学の方法によって読み解く．

○授業の到達目標

1. スポーツ文化論の領域を理解する．
2. 体育とスポーツの異同を説明できる．
3. スポーツを文化としてとらえるまなざしを養う．

○授業概要

1. スポーツ文化論を学ぶことの意義．
2. スポーツを文化として理解する視点の提示．
3. スポーツ人類学の内容と研究方法．

○授業スケジュール

1. ガイダンス
   体育史とスポーツ文化論を学ぶ意味について
   小レポート:体育とスポーツの違いについて)
2. スポーツ人類学への誘い(1)
   スポーツ人類学とは

小レポート：大相撲の国際化について
3. スポーツ人類学への誘い(2)
スポーツ人類学の現在
小レポート：文化にしばられたからだとは，一体どういうことか？
4. スポーツ人類学の視角(1)
スポーツと儀礼・宗教①
小レポート：儀礼的スポーツとオリンピックの違い及び類似性について
5. スポーツ人類学の視角(2)
スポーツと儀礼・宗教②
小レポート：スポーツをめぐる超自然的現象の経験あるいは聞いた話
6. スポーツ人類学の視角(3)
植民地主義とスポーツ文化の拡大
小レポート：オリンピックやワールドカップなど，近代スポーツの国際大会が国民国家の形成に果たしてきた役割を説明せよ
7. スポーツ人類学の視角(4)
スポーツにおけるエスニシティとナショナリティ
小レポート：エスニシティ，ナショナリティを意識するのは，いつ，どういう状況においてか？
8. スポーツ人類学の視角(5)
スポーツのシンボリズム
9. スポーツ人類学の視角(6)
文化政策としてのスポーツ
小レポート：スポーツの総合政策的側面とは，どのようなことが考えられるか？
10. スポーツ人類学の視角(7)
スポーツの記憶と歴史
小レポート：スポーツのライフヒストリー
11. スポーツ人類学の視角(8)
ルールと慣習
12. スポーツ人類学の視角(9)
観光・開発・国際援助とスポーツ
小レポート：民族スポーツ（伝統スポーツ）が観光化することの功罪
13. スポーツ人類学の視角(10)
スポーツ・ジェンダー・フェミニズム
14. スポーツ人類学の研究法
先行研究の調べ方．フィールドワークについて．スポーツ人類学の文献
15. 試験

基本的に，毎回の授業の進め方は，教科書を講読しながら，適宜欄外の注やコラムで補足説明することとし，受講生への質問を行う．毎回の小レポートの設問は，『教養としてのスポーツ人類学』[7]から採ったり，参考にしたりした．毎回小レポートを課したのは，自分の考えを短時間で簡潔に書く能力をつけさせたいという考えからである．今回は小レポートを成績評価に反映させることはしなかったが，来年度以降については検討する．15回目の試験は，授業で取り上げた内容のなかから問題を作成し，筆記試験とした．

Ⅲ－4 「コース初歩学習」：スポーツ文化へのまなざし

2008（平成20）年度から共通教育科目の「コース初歩学習」（全学必修．1年次前学期開講）のうち、保健体育専修およびスポーツ健康科学課程 1 回生を対象として，保健体育講座教員11名が半期15回の授業を担当（世話人が複数回担当）することになった．このうち，筆者は「スポーツ文化へのまなざし」と題して，1回分の授業を担当することにした．15回分の1回ではあるが，筆者はこの授業を2年の前期に開講する，先に述べた「スポーツ文化論」への複線と位置づけた．本授業の目的は，まだ専門教育を受ける前の体育専攻生が，どのような現象をスポーツあるいはスポーツ文化と認識しているのか，を探ることにある．そこで，筆者は以下に掲げる設問を受講生に提示した．

以下の諸活動と諸状況について考えてみよう．

1. 肌寒い10月のある夜に，マサチューセッツ州北東部の小さな町のオートバイレース場で行われた自動車破壊競争．
2. 農民や二流の実業家ややくざの一群がテネシー州の片田舎の 1 軒の古い納屋に押し寄せて，特別に訓練された2羽の雄鶏の死闘を観て賭をする．
3. スペインのバスク民族が広大な草原に集まって，一斉に草刈り競争や丸太切り競争をする．
4. 愛媛県松山市在住の40代のキャリアウーマンは，金を払って，毎週松山市のとあるヨーガ教室で 2 時間ヨーガに没頭している．
5. ダンス甲子園で，出場3回目のA高校チーム6人が悲願の初優勝．
6. 定年を迎えた東京在住の60歳の男性は，一念発起して四国遍路を決行．2ヶ月かけて88番札所をすべて徒歩で巡った．
7. イギリスサッカーのプレミアリーグ第10節．リバプール対マンチェスターユナイテッドのゲームは，リバプールが2対1で勝ったが，リバプールのラフプレイに怒ったフーリガンがマンチェスターユナイテッドのフーリガンと衝突．32人の負傷者が出た．

8. 筋肉バトルは大詰めで，残るショットガンタッチで勝者が決するという大接戦の展開．最後は，7m90を制したハンドボールの宮崎選手が，栄冠を手にした．
9. 全身を使ってWIIのテニスゲームをし，友達と競う．
10. A市郊外に住むある中年男性は，最近メタボが気になりだし，マイカー通勤から自転車通勤に切り替え，40分かけて会社に行っている．
11. 毎年アラスカで行われる犬ぞりレース．
12. 小学校の運動会で行われるパン食い競争．
13. 近所の子どもたちがするおにごっこ．
14. アメリカ先住民チェロキー族は伝統的にラクロスを行うが，試合の前に呪医は選手の腕にかき傷を施す慣習がある．
15. オーストラリアのアボリジニは，2つの集団が紛争を解決するために行う決闘の1つの方法として棍棒試合を行っていた．
16. キスケ温泉のサウナに入り，10分×5セットたっぷりと汗を流す．
17. MLBオールスターゲームでイチロー選手がランニングホームラン．
18. 山野を歩き回って野鳥観察を楽しむバードウォッチング．
19. 土佐の一本釣り．
20. 深夜、東京都心のオフィス街に暴走族が集まって行われる04レース．

さて，これらの諸活動のなかのどれをスポーツと認定するか？

およそ5分で考えさせ，スポーツと認定する○，認定しない×，どちらともいえない△を付けるよう指示した．学生の答は予想通りさまざまで，1～20の設問は大半が○×△に分かれた．例えば，○×に限っていうと，1．を○とした学生は，「競争だから」という理由であったし，×とした学生は，「破壊行為は倫理的にみてスポーツと認められない」という理由であった．また6．では，四国遍路は「修行のようなもの」だから，スポーツと認定しないなど，スポーツという現象の認識というのは，実に多様であった．ただし，1～20までの答すべてについてその理由を聞くことができず，討論する時間もほとんど取れなかったことが残念であった．

また，「スポーツ文化へのまなざし」は2年目で，2年続けて「どれをスポーツと認定するか？」と尋ねたが，「どれをスポーツ文化と認定するか？」と尋ねたら，○が×に，あるいはその逆になったり，△になったかもしれない．また，討論の時間を確保しようとするなら，設問は半分程度にした方がよいかもしれない．

Ⅲ－5 体育学特論Ⅴ

大学院教育学研究科修士課程保健体育専修1年次前学期に開講．

2008(平成20)年度の事例

受講生3名

○授業のキーワード

スポーツ人類学,エスニシティ,ナショナリティ

○授業の目的

スポーツを1つの文化複合としてとらえ，スポーツ人類学の視点からエスニシティ，ナショナリティの問題を多角的に考察する．

○授業の到達目標

スポーツにおけるエスニシティ，ナショナリティについて各自小論を作成する．

○授業スケジュール

1. ガイダンス
   スポーツ人類学について
2. 小論のテーマの検討
3. スポーツと民族について口頭発表
4. スポーツと民族について省察
5. スポーツと人種について口頭発表
6. スポーツと人種について省察
7. スポーツと国家・国民について口頭発表
8. スポーツと国家・国民について省察
9. スポーツとエスニシティ，ナショナリティについて口頭発表
10. スポーツとエスニシティ，ナショナリティについて省察
11. 民族スポーツと近代スポーツについて討論
12. 小論の内容について口頭発表(1)
13. 小論の内容について口頭発表(2)
14. 小論の内容について口頭発表(3)
15. 小論の内容について最終発表

大学院の授業では，学部の授業と違って，広く浅くではなく，1つの課題を深く掘り下げて考察することが求められるし，またそうした力を養うことが大事であると考える．そこで，筆者が担当する体育学特論Ⅴでは，授業の初回に，成績評価の対象となる小論のテーマを「エスニシティ，ナショナリティ」に決め，毎回このテーマに関わる重要なキーワードについて調べてくるよう指示した．調べた内容は，次の授業で口頭発表するという手順を踏んだ．最終的には，筆者が提示したエスニシティ，ナショナリティという大テーマの

もと，サブテーマは受講生各自が決めて，小論を作成させた．すなわち，毎回の調べ授業が最終的に小論につながって，小論を論理的に記述しやすいように配慮した．

Ⅳ まとめ

本小論では，筆者が「大学教育におけるスポーツ人類学(Part2)」にシンポジストとして参加したことを機に，あらためて大学教育におけるスポーツ人類学を考えてみた．本小論で挙げた事例はほんの一部でしかないが，今まで他大学の教員がどのような授業をしているのか，ほとんど知る機会がなかっただけに，大変参考になったし，刺激も受けた．この経験を今後の筆者の授業にも活かしていきたいと思う．

スポーツ人類学はまだまだ若い学問で，研究者の数は少ない．また，大学院でスポーツ人類学を学び，大学に職を得ている人数もまだまだ少ない．したがって，一体どれくらいの大学でスポーツ人類学の授業が行われているのかはわからない．しかし，着実に大学教育におけるスポーツ人類学の実践は増えているし，これからも増え続けると思われる．なぜそういえるかというと，第1に，今日の日本社会がスポーツ文化の担い手を求めているからである．つまり，日本にスポーツはあるが，スポーツ文化はない，と多くの人々が感じはじめたからではないかと考えられる．この20年で，スポーツ文化あるいは文化としてのスポーツを標榜した書籍が多数世に出ていることなどを初めとして，スポーツ文化の啓蒙は確実に進んでいるといえよう．また，「21世紀の国民スポーツ振興方策」では，「スポーツ文化」が謳われている．こうした社会状況にあって，大学教育におけるスポーツ人類学の重要性はますます高まっていくであろう．

むろん，スポーツ文化を扱うのは，何もスポーツ人類学だけではなく，従来スポーツ史やスポーツ社会学でも扱ってきた．しかし，スポーツを一個の文化複合としてとらえ，さまざまな視覚から検証を行うのは，スポーツ人類学が最も得意とするところである．したがって，筆者は大学の講義や実技を通して，学生にスポーツ文化という意識を芽生えさせ，将来スポーツ文化の担い手として成長してくれることを願って，日々教育と研究に努めていくことが大切なのではないかと考える．

文献

1）石井隆徳編著　2008『スポーツ人類学』，明和出版，p. 2

2）真田久　2003　スポーツ人類学専門分科会の研究状況の足跡，日本体育学会第54回大会号，p. 646

3）山田理恵　2003　薩摩の「ハマ投げ」に関する研究，体育史研究　20号，pp. 13-22

　　2004　「ハマ投げ」の近・現代ー鹿児島における「学舎」の教育を中心にー，中京大学体育研究所紀要，No. 18，pp. 49-58

4）髙橋京子　2006　キーノートレクチャー：南インドケーララ州，カラリパヤットの諸相ーホリスティック性を手がかりにー，日本体育学会第57回大会予稿集，pp. 47-48

5）熊野健　1999　イフガオ族のドパップ相撲；ルソン島北部における儀礼的遊びと競争，スポーツ人類学研究，創刊号，pp. 1-23，日本スポーツ人類学会

　　2004　スポーツと観光（寒川恒夫編『教養としてのスポーツ人類学』），大修館書店，pp. 29-36，

6）稲垣正浩・谷釜了正編著　1995　『スポーツ史講義』，大修館書店

7）寒川恒夫編著　2004『教養としてのスポーツ人類学』，大修館書店